

第四回物理学 A レポート問題の略解

福島孝治 (東京大学院総合文化)

2011 年 7 月 18 日: ver. 1.0

4-1: この問題では, 質点系の角運動量に関する性質を議論している. 講義ノートをちゃんとまとめると, 解答になるはず.

質量がそれぞれ m_i の質点 ($i = 1, \dots, N$) に対して, その位置ベクトルを \mathbf{r}_i とし, 運動量を \mathbf{p}_i とする. このとき, 全角運動量 \mathbf{L} は,

$$\mathbf{L} = \sum_{i=1}^N \mathbf{r}_i \times \mathbf{p}_i \quad (17)$$

である. この質点系の重心ベクトル \mathbf{R} は,

$$\mathbf{R} = \frac{\sum_i m_i \mathbf{r}_i}{\sum_i m_i} = \frac{\sum_i m_i \mathbf{r}_i}{M}$$

である. ここで, M は質点系の全質量である. それぞれの質点の位置ベクトルを重心からの相対ベクトル \mathbf{r}'_i を用いて表すと, $\mathbf{r}_i = \mathbf{R} + \mathbf{r}'_i$ となる. 運動量ベクトル \mathbf{p}_i は, $\mathbf{p}_i = m_i \dot{\mathbf{r}}_i = m_i \dot{\mathbf{R}} + m_i \dot{\mathbf{r}}'_i$ と表される. これらを用いて, 全角運動量を表すと,

$$\mathbf{L} = \sum_i (\mathbf{R} + \mathbf{r}'_i) \times m_i (\dot{\mathbf{R}} + \dot{\mathbf{r}}'_i) = \sum_i (m_i \mathbf{R} \times \dot{\mathbf{R}} + \mathbf{r}'_i \times (m_i \dot{\mathbf{r}}'_i) + (m_i \mathbf{r}'_i) \times \dot{\mathbf{R}} + \mathbf{R} \times (m_i \dot{\mathbf{r}}'_i))$$

となる. 最後の二つの項は重心の定義よりゼロ ($\sum_i m_i \mathbf{r}'_i = 0$) になり, 重心の角運動量 $\mathbf{L}_G = \mathbf{R} \times M \dot{\mathbf{R}}$ と, 重心回りの角運動量 $\mathbf{L}' = \sum_i \mathbf{r}'_i \times (m_i \dot{\mathbf{r}}'_i)$ を用いて,

$$\mathbf{L} = \mathbf{L}_G + \mathbf{L}'$$

となることがわかる.

全角運動量の運動方程式 (トルクの方程式) は, それぞれの質点に働く外力を \mathbf{F}_i として,

$$\frac{d\mathbf{L}}{dt} = \sum_i \mathbf{r}_i \times \mathbf{F}_i = \sum_i (\mathbf{R} + \mathbf{r}'_i) \times \mathbf{F}_i = \mathbf{R} \times \sum_i \mathbf{F}_i + \sum_i \mathbf{r}'_i \times \mathbf{F}_i$$

となる. 右辺の第一項は重心の角運動量の時間変化を表し, それは重心の運動方程式と同じ情報を持つ⁷. 一方, 第二項は重心回りの角運動量 \mathbf{L}' の時間変化を表す. ここで, 外力が一様な重力の場合を考えると,

$$\frac{d\mathbf{L}'}{dt} = \sum_i \mathbf{r}'_i \times (-m_i g \mathbf{e}_z) = \left(\sum_i m_i \mathbf{r}'_i \right) \times g \mathbf{e}_z = 0$$

となるので, \mathbf{L}' は保存されることがわかる⁸.

⁷重心の運動方程式から, この方程式を導くことができる (宿題).

⁸この式変形にはやや乱暴な点があることを補足しておく. 重心まわりの角運動量 \mathbf{L}' の運動方程式は,

$$\frac{d\mathbf{L}'}{dt} = \frac{d}{dt} \left(\sum_i \mathbf{r}'_i \times (m_i \dot{\mathbf{r}}'_i) \right) = \sum_i \dot{\mathbf{r}}'_i \times (m_i \dot{\mathbf{r}}'_i) + \sum_i \mathbf{r}'_i \times (m_i \ddot{\mathbf{r}}'_i)$$

4-2: 問題文では半径は a となり，図では直径が a であったので混乱を招いたかもしれないが，本文に合わせることにする．練習問題 page 51 の脚注 (a) にあるように，円柱の中心軸に対する慣性モーメントは， $\frac{Ma^2}{2}$ である．問題は円柱の辺を軸としたときの慣性モーメント I であるが，平行軸の定理により，

$$I = \frac{Ma^2}{2} + Ma^2 = \frac{3Ma^2}{2}$$

となる．

ちなみに，図に従って，直径を a とした場合には， $I' = \frac{3Ma^2}{8}$ となる．

となるが，第一項はもちろんゼロになる．第二項に運動方程式 $m_i \ddot{\mathbf{r}}_i = -m_i g \mathbf{e}_z$ を代入したいが，代入されるのは相対ベクトルであり， $\ddot{\mathbf{r}}'_i = \ddot{\mathbf{r}}_i - \ddot{\mathbf{R}}$ であることに注意すると，

$$\frac{d\mathbf{L}'}{dt} = \sum_i \dot{\mathbf{r}}'_i \times \left(m_i (\ddot{\mathbf{r}}_i - \ddot{\mathbf{R}}) \right) = \sum_i \dot{\mathbf{r}}'_i \times (m_i \ddot{\mathbf{r}}_i) - \sum_i (m_i \dot{\mathbf{r}}_i) \times \ddot{\mathbf{R}} = \sum_i \dot{\mathbf{r}}'_i \times (-m_i g \mathbf{e}_z)$$

となって，上の式になります．

$m_i \dot{\mathbf{r}}'_i = \mathbf{F}_i$ が成り立つように説明していたけど，変じゃないか？と指摘されました．結果としては同じ式がでてくるのですが，そんな運動方程式が成り立っているわけではないです．重心の運動が必要です．